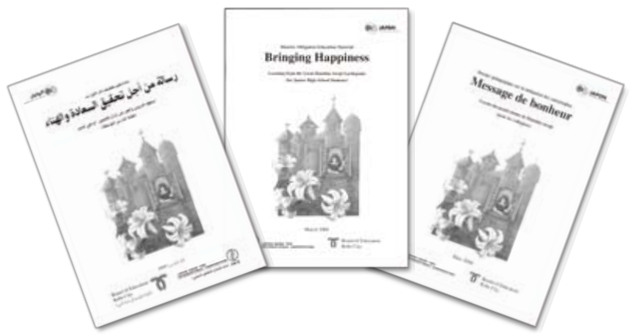
兵庫県

神戸市

再建されたブーメルデス県の小学校では、完成記念行事が行われ、地震防災の大切さも伝えられた



神戸市の協力で作成されたアラビア語・英語・フランス語の防災教育教材。英語版は、今年５月の地震で被災した中国・四川省にも贈られた

阪神・淡路大震災

1995年1月17日、淡路島や神戸市など兵庫県南部を直撃した都市型震災。死者約6,400人、負傷者4万3,000人以上。地域社会の中で住民が助け合いながら復興を遂げ、これを機にコミュニティー防災の考え方が広まった。また、延べ117万人が被災者支援のボランティア活動に参加したことから、1月17日は「防災とボランティアの日」に。JICAは2007年、兵庫県と共同で国際防災研修センターを設置し、開発途上国で防災に携わる人材の育成に努めている。

震災を乗り越えて

アルジェリアと深まるきずな

1995年、6,400人もの死者を出す阪神・淡路大震災に見舞われた神戸市と、2003年に死者2,268人、負傷者1万人以上を生む大地震を経験したアルジェリア。多数の犠牲者を出し、同じ絶望を味わった両国が今、悲しみを乗り越え、きずなを深めている。

悲しみから生まれた交流

「地震のとき、犬を連れた日本人が助けに来てくれた」「日本の小学生と友達になりたい」

２００５年、当時の国際協力銀行（ＪＢＩＣ）の調査団が北アフリカ・アルジェリアの小学校を訪問。そのとき子どもたちから聞いたこんな声をきっかけに、神戸市とアルジェリアのきずなが芽生えた。

交流は、２つの惨事に端を発する。一つは１９９５年の阪神・淡路大震災。震度７の激震により、死者・行方不明者６４００人以上を出した神戸市に、アルジェリアから90張りの大型テントが支援物資として贈られた。

もう一つは03年、２２６８人が命を落とし、１万人以上が負傷、約18万人が家を失ったアルジェリア大地震だ。日本は国際緊急援助隊を派遣し、その後、中長期的な復興支援として、被害の大きかったブーメルデス県とアルジェ県の小学校26校、中学校４校、高校６校の再建を支援するために、約20億円をアルジェリア政府に貸し出している。冒頭の現地調査は、この円借款を前提に行われたものだ。

教材『幸せ運ぼう』アラビア語版を使って行われたモデル授業

学校の再建と防災教育

学校再建は順調に進んでおり、現在半数以上が完成。新校舎での授業も再開し、子どもたちは元気よく学んでいる。

学校施設の再建と同時に、将来の地震災害に備える防災や減災のための取り組みを、学校を拠点に地域ぐるみで進めていくことが重要だと考えたＪＢＩＣは、事業の審査段階から神戸市の防災専門家に協力を依頼した。

06年、ブーメルデス県の小学校が完成した際に開かれた記念行事にも神戸市の専門家が出席し、復興の経験や防災教育の取り組みを紹介。一人一人が防災の意識を持つこと、地域の人々が互いに助け合いながら震災を乗り越えることの重要性などを伝えた。小学校の校庭では、赤新月社（赤十字）や消防庁なども参加して模擬避難訓練が行われた。

小学校再建記念行事の一環で模擬避難訓練も実施された

また、神戸市が震災を受けて作成した中学生向けの防災教育教材『幸せ運ぼう』を紹介。この教材には、地震のメカニズムや安全な住まいづくりの方法などがイラストや写真を用いて分かりやすく紹介されている。これに関心を持ったアルジェリアから、「ぜひアラビア語版がほしい」との強い要望が上がると、ＪＢＩＣは、神戸市教育委員会やアルジェリア大使館と協力して、アラビア語版のほか、英語版とフランス語版を各１０００部作成した。

ブーメルデス県の小学生からのメッセージや絵がJBICを通じて真野小学校に届けられた

これを使って現地の小学校でモデル授業を行った神戸市教育委員会の松崎太亮（たいすけ）さんは、「自分の身は自分で守る。私たちは震災後13年間そう教育してきました。神戸のやり方を参考にしながら自分たちの防災教育を創（つく）ってもらえたら」と話す。

学校の再建と地震大国・日本の知見を生かして

一方、被災した神戸市の真野小学校では、アルジェリア地震の際、阪神・淡路大震災で受けた支援のお礼にと、生徒たちが描いた励ましの絵をアルジェリアに贈った。その後も、「アルジェリアでも神戸と同じように大きな地震があって大変だと思うけれど、一緒に頑張っていきたい」という思いを込めたビデオメッセージを贈るなど、ブーメルデス県の小学生との絵やビデオメッセージを通じた交流が続けられている。

こうした神戸とアルジェリアの交流を支えてきたＪＩＣＡの築野元則さんは今後について、「これで終わりではなく、新ＪＩＣＡとしてもアルジェリアの防災教育を進めていきたい」と意欲的だ。ＪＩＣＡ兵庫に防災教育をテーマにした新たな研修コースを立ち上げたり、アルジェリアのように日本と同じ地震国に対して神戸市の職員を防災教育の専門家として派遣するなど、地震大国・日本の経験や知見を生かした新展開も考えられる。

松崎さんも「地域と学校がばらばらに防災活動するのではなく、もっと横のつながりを大切にするような学習の拠点づくりやセミナーなどができれば」と話しており、神戸とアルジェリアの交流はこれから一層の広がりを見せそうだ。